

獅子狩り

やまとの翁

此間から上野の動物園へ、獅子が見えたといふので、皆から「連れて行つて見せて呉れ〜」と毎日の様に、せがまれたけれども、とても行つたからとて、人で見られもしまい、殊に、年寄が子供をつれて人込の中に行くのは、危いものと思つたのである日曜日朝、「それなら今から面白い獅子狩りの話をしてやらう」といふと、話し好の子供らの事だから、「お老爺さん、獅子狩りの話して〜」？「面白いの」？と叫びながら、皆一度に翁の膝え詰めかけて來たので、翁は例の通り、先づ悠然と一服喫かしながら、次の様な話しを出したことである。

「獅子の話は 昨年あたり婦人と子どもといふ雑誌に出たからも、皆が知つて居る筈、何しろ、前脚で一つ撲ると、牛や馬の様はあんな大きな獣の頭でも忽ち摧けて仕舞ふ位だから何しろスパラシ一力といはんければならぬ。だから獅子狩りなどは、どうしても狩りの中でも、一番危い仕事に違ない。

今から話しをしようといふのは、リ井ングストン——あの名高い暗黒世界——亞弗利加の探検家のリ井ングストンが亞弗利加滞在中の獅子狩りの話なのだが、其話はこゝなのである。

或時リ井ングストンが滞留つて居つた所の村へ時々獅子が出て來て困つた、どーも夜になると、不意に牧場へ飛び込んで來ては、牛を殺す、羊を、持つて行く、そこでリ井ングストンが土人に忠告

した。

「一体獅子といふ獸は一匹さへ殺して仕舞へば残りの者は、大低夫を知つて皆其場所を逃げて仕舞ふから、どーだ、今から一つ獅子狩りをやつて一匹殺さうじやないか、己が一番先きに立つから。」  
 そんならといふので、土人ども（亞弗利加の黒坊だよ）は、そー、彼れ是れ二三十人も集つて來た。そこで、リ井ングストーンが大將になつて、愈々獅子狩りに出懸けた。」

「それから……」

「それから。」「それから、どーしたの？」

「それから、だんく行つた所が、獅子どもは、凡そ四五町先きの、樹木の一面に生ひ繁つた、小山の岩の間に隠れて居るといふので、皆で以て其山を取り巻いて、だんく遠巻にして攻め寄せ

た。

「暫らくすると、一人の黒坊が忽ち一匹の獅子が岩の上に座つて居るのを見附けたもんだから、ズドンと一發やつた所が、ねらひ外れて、丸は岩に當つて、火花の如くに、岩は碎けて飛んだ獅子はいきなりふり返つて つッ立ち上りさま、丸の當つた場所に噛み附いたが、忽ちにして樹立深さ所へ飛び去つて仕舞つた。」

暫らくすると、今度はリ井ングストーンが、又一匹の獅子を見付けたが、恰前（ちやうぜん）のと同じ様な位置で距離は其處から、九十尺許りと見たから、猶豫なく二ツ丸を飛ばした。が、當り所は急所を外れた。

から堪らない。猛然として獅子は立ち上がったと見たが、忽ち丸食ひ獅子の本性を顯はして、

所謂獅子奮迅の勢で以て、リ井ングストンに飛びかゝつて、彼が今や第二發の丸を込めやうとして居る所へ、いさなり飛び附いて其肩を噛へながら、丸で犬が鼠を噛へた様な鹽梅に、二三度烈しく振つて恐ろしく耳元でうなつた。そこでさすがに剛氣のリ井ングストンも忽ち氣絶して人事不省に陥つた。

大勢の土人どもは、此有様を見て居つたが、どしも仕様がな、たゞ「ワ〜」といつて騒いで居つた。中にも一人の土人は、近く寄つて銃を向けたか、之を見るや否や、獅子は、リ井ングストンを捨て置いていきなり其男に飛び附いた。今一人の土人は鎗を以て、獅子に突きかゝつた所が獅子は同じく此男の首に飛び附いた。

けれども、前程からの立ち廻はりが、あまり烈

しかつたと見えて、さすがの手負ひ獅子も、鎗を以つた男の肩に爪を突き立てたなり、とうとう轉げて死んで仕舞つた。

リ井ングストンもやつと危い所を逃れた。けれども、獅子に噛み附かれた所は、大變な大怪我で、丁度肩から腕へかけて、十一の齒傷を負はされてあつたぞうだ。然し夫でも、前から用心して行つて厚いジャケットを衣て居つたから、まだしも其傷は烈くなかつたといふことだ。

今まで黙つて聞いて居つた子供等は、此時一度に、「夫でお終ひ」？「あ、面白かつた」「れ老爺さん、上野へ獅子見に連れてつて下さい、行きたいな〜」。